



藝
術
FESTIVAL 2022

ノイタニ
Echolalia Topophilia

Ryogoku Monten Hall presents Ryogoku Art Festival 2022 Director : Asako MIYAKI

第7回両国アートフェスティバル2022
仮想郷土 -Echolalia, Topophilia-



公演に寄せて

仮想郷土 —。ある瞬間唐突に、強烈な懐かしさの感覚が蘇ることはないだろうか。ある音を聴いた時に。音響に包まれた時に。香りと遭遇した時に。その時の感覚は「リアル」なものだけれど、その感覚が呼びました「場所」自体は瞬間ごとに生起しては消える、イメージという名の「ヴァーチャル」な存在だ。フィリップ・ケオー曰く、ヴァーチャルの原義はラテン語の「virtus (力・エネルギー)」であり、それは現実に対する虚構ではなく、対象のうちに実在する潜在力である。イメージの連関から脳内に広がる「世界」はまさにこの潜在力が生み出したものである。

そもそも私たちは本当にリアルな場所に生きているのだろうか。AI、VR、イマーシブ・オーディオ—それらがもたらすものがたとえ本来の目的から外れたり、エラー・メッセージを返してきたとしても、いまそこにあるテクノロジーがもたらすものがこちらを揺さぶった瞬間、そこには名づけぬ価値が生まれる。人にとって、過去と未来はいつも現在と共に在り、絶えず思考は流れ、空想の光景が現れては消える。人間 vs AI、生の歌声 vs ヴォーカロイド、生の音 vs 録音された音、人間が奏でる音 vs 電子音響 — そこには優劣もなく、本物らしさを目指すというベクトルもない。たとえその表現が途轍もなく歪なものを返してきたとしても、その瞬間にこころが動いてしまったら？ そこにはテクノロジーの誤読が生んだ一つの場所が立ち現れる。たとえばゲーム空間は仮想のものでありながら、ある種の「環境」だ。人は五感 + α の感覚を使って、時に分身としての自分の身体の感覚を操りながら架空の世界に入り込む。そこにあるのは「探索」という、人間の持つ根源的な欲望。未知の世界に入り込むとき、手がかりとなるのは個々の感覚器官であり、五感を横断するような知覚体験がなされる。本フェスティバルでは、リアルとヴァーチャルの往来するここ両国門天ホールがこうした探索の拠点となる。その場で立体音響と映像と生演奏の息遣いを感じながら体験するのか、あるいはモニター越しに出現するヴァーチャルサラウンドの音響と映像とが作り出す自分の身体内部の空間を探索するのか —。仮想郷土へようこそ。

第7回両国アートフェスティバル 芸術監督 宮木朝子

宮木朝子 Asako MIYAKI

作曲家、空間音響作家。桐朋学園大学、INA-GRM、MOTUSにて作曲、電子音楽、アコースモニウム演奏法を学ぶ。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了、現在同博士課程に在籍。現代音楽を起点に、映像 - 香り - 身体 - 特異な場などと関係を結ぶ音響制作とその空間展開、奄美群島の聖地におけるフィールドワークやサウンドインスタレーションなどを行う。

ソロアルバム『Virtual Resonance』は「磨き上げた鮮烈な響きの音像 (CD ジャーナル)」「雅楽とエレクトロニカ、現代音楽が交差する宇宙レベルのアンビエント (Beams Records)」と評される。ICMC (国際コンピュータ音楽会議) 2016、2019、New York City Electroacoustic Music Festival 2019 入選、5.1ch サラウンド音響作品〈Afterimage〉によって「坂本龍一 | 設置音楽展コンテスト」最優秀賞受賞。コニカミノルタ・プラネタリア東京「星空ラウンジ」にて、22.2ch のための空間音響展示『平均律 22.2ch Remix』を長期プロジェクトとして継続中。

【プログラムA】オーディオ・ビジュアル・コンサート

「Yadori_avatar」

日時 2022年8月9日(火)、10日(水) 18:30開演

リアルタイム上演とオンライン配信による現代音楽-現代アートとしてのゲームプレイ-上演の新作を中心に構成。宮木朝子の音楽と、ゲーム映像やVR映像などとのコラボレーションの新作他を上演。一晩通じて、視覚-聴覚の邂逅、そのあり方の問い合わせを行い、“リアルとヴァーチャルの往来”を表現します。

さらに、ドイツからZKMの元客員作曲家・石井紘美、ドレスデン音楽大学電子音楽スタジオ元所長の作曲家ヴィルフリート・イエンチを迎え、ヴィジュアル・ミュージックの上演と映像出演によるミニレクチャーを行います。

演目

開場時音楽 立体音響でお楽しみください。

● イ・スンギュ 《Tonality generated by 60》(2021 公募入選作品・初演)

① 小阪淳+宮木朝子 《Yadori_Scape_Notation》 -game映像と楽器奏者のための

(2022 委嘱・世界初演)

サクソフォン：大石将紀 映像：小阪淳 作曲・エレクトロニクス：宮木朝子

② 馬場ふさこ+宮木朝子 《Hidden Garden -VR映像とヴァーチャル・サラウンドver.》(2022 改訂初演)

映像：馬場ふさこ 音楽：宮木朝子

③ 宮木朝子 《Opera acousma 見ることなしに聴くオペラ III - Morphoria》 (2022 委嘱・世界初演)

マルチチャンネルアコースマティック作品 installation(*配信時映像)：千田泰広

④ 宮木朝子+小阪淳 《Echolalia - for solo violin, electronics and video》(2018)

ヴァイオリン：林原澄音 作曲・エレクトロニクス：宮木朝子 映像：小阪淳

メタルヴァイオリン制作：ニコラス・ハーバート

海外招待作曲家 — マルチチャンネルによるビジュアルミュージック作品

⑤ 石井紘美 《Time Crystals》

(2021 招待作品・改訂初演)

⑥ ヴィルフリート・イエンチ 《The Unknown Planet》

(2021 招待作品・改訂初演)

ヴィデオトーク・ミニレクチャー

開場時音楽

● イ・スンギュ 《Tonality generated by 60》(2021 公募入選作品・初演)

もし、ピアノにCキーがあるとしたら、どんな曲が作曲できるだろうか。Cキーから出てくる7つのモードは構成音が同じであるが、互いに間隔が異なるため、そのモード内で役割が変わる。例)Ionian (Major) -> Mixo-lydianの場合、b7 NoteはLeading toneの役割が消える。コンピュータはC鍵のピアノでMiddle Cノート(MIDI Pitch 60)からTonalityを一つずつ提示する。限られたノートではあるが、結局1、b2、2、b3、3、4、b5、5、b6、6、b7、7をすべて使用する。ノート一つにつき一つのTonalityを持ち、コンピュータアルゴリズムによりAmbient Soundと共に出力する。ピアノが提示するノートによってTonalityが変わり、Modeはぶつかり合いながら音響空間を作る。

イ・スンギュ Yi SEUNGGYU (作曲・公募入選作品)

電子音楽作曲家、音響デザイナー 韓国生まれ、日本を拠点として活動しているミュージシャン。ベーシストで音楽活動を始め、ソウル芸術大学卒業。専門は作曲、電子音楽、音響設計。2019年より、芸術工学の研究のため日本へ留学。2020年11月doravideo(一楽儀光氏)が主催する「GIGAMODULAR」の出演をきっかけに日本で音楽活動を始め、「2021 GIGAMODULAR岡山」、「2020 KFoM(Kansai Festival of Modular)」、「2021 GIGAMODULAR東京」、「2021 SICKHAUS(中尾憲太郎from Number Girl) & Taro Aiko(from ENDON/M.A.S.F)福岡ライブ」、「2021 GIGANOISE九州」などに出演。

① 小阪淳+宮木朝子 《Yadori_Scape_Notation》 -game映像と楽器奏者のための

(2022 委嘱・世界初演)

サクソフォン：大石将紀 映像：小阪淳 作曲・エレクトロニクス：宮木朝子

一つの「ヴァーチャル・ランドスケープ」として、VRのゲームエンジンによって制作された実際に探索できる環境としての映像が投影される。ヴァーチャル・門天ホールの中に抽象的なオブジェクトが出現することからゲーム=上演は開始され、サクソフォン奏者がリアルタイムのゲームプレイ=演奏を行う。演奏者は作曲者の意思が「宿った」状態の「アバター(分身)」として位置づけられ、ゲームの空間内を演奏行為によって「探索」し、その出来事、事物を「拡張」する。実在の空間と虚像としての空間が接続されるきっかけは、立ち会う側の知覚の搅乱である。この上演=ゲームは、関わる者すべてにとって、視覚・聴覚・体性感覚の不確かさと、知覚刺激によって操作される心理状態との複雑な関係性に投げ込まれる体験となる。

小阪淳 Jun KOSAKA(映像・委嘱作品)

1994年-2000年SFマガジン(早川書房)装画担当。SF文学の装画を手がける。2004年-2014年沖縄県ワンドーミュージアムに作品常設。2006年Sony ExploraScience(北京)に4作品常設。文部科学省「一家に一枚宇宙図2007」制作に参加。2007年カンヌ国際広告祭2007Cyber Lions銅賞受賞。2000年～朝日新聞にビジュアル連載。同年東京都写真美術館「見えない世界のみつめ方」参加、展示作品「VIT2.0」が収蔵される。2018年、種子島宇宙芸術祭参加。2020年Society for Arts and Technology(カナダ)において宮木朝子との共作「Echolalia II」が選抜、上映される。

宮木朝子 Asako MIYAKI(作曲・委嘱作品) P1参照

大石将紀 Masanori OISHI (サクソフォン)

東京藝術大学卒業、同大学大学院修了。渡仏しパリ国立高等音楽院卒業。国内、ヨーロッパ、アジアでの音楽祭出演、リサイタルやマスタークラスの開催、ラジオ、テレビ出演、TVCM録音、(一財)地域創造の支援アーティストとして全国でアウトーチを展開するなど幅広く活動中。14年「東京 現音計画」で第13回佐治敬三賞、20年2枚目のアルバム「SMOKE」が令和元年度文化庁芸術祭優秀賞受賞。現在、大阪音楽大学特任准教授、東京藝術大学、洗足学園音楽大学、エリザベト音楽大学講師。

② 馬場ふさこ+宮木朝子 《Hidden Garden -VR映像とヴァーチャル・サラウンドver.》

(2022 改訂初演)

映像：馬場ふさこ 音楽：宮木朝子

この作品は全天周(Full dome)映像とサラウンド音楽によるイマーシブ・コンテンツ作品を、VR映像とヴァーチャル・サラウンド用に再構成している*。International fulldome festival “Reflections of the universe”(ロシア・ヤロスラブリ)にて、Yaroslavl Best Artistic Show -Prize受賞、2019年2月に国際科学映像祭ショートフィルム部門で最優秀賞を受賞している。

「各自の脳内にある残像の庭を体験する」と言う「脳内散歩」のシリーズの一つとして制作された。仮想の庭を視聴者自身が唯一の登場人物となって彷徨する作品。

*配信用はVRとヴァーチャル・サラウンド 会場視聴は映像とAuro9.1chによるサラウンドヴァージョン

馬場ふさこ Fusako BABA (映像)

札幌シティジャズ、ホワイトイルミネーション、東京デザイナーズウィーク等へのフルドーム環境映像の提供のほか、ドイツやカナダ、ロシアなど国内外のフルドーム映像祭で数々の賞を受賞したアート映像作品を手がける。最近では 360° VR映像作品も制作。万華鏡や曼荼羅をモチーフとし、美しい色合いとシンメトリックなパターンが彩る独自の技法により、心象風景や美しく情感豊かな世界観の表現を追求している。

宮木朝子 Asako MIYAKI (作曲・委嘱作品) P1参照

③ 宮木朝子 《Opera acousma 見ることなしに聴くオペラ III - Morphoria》

(2022 委嘱・世界初演)

マルチチャンネルアコースマティック作品 installation (*配信時映像)千田泰広

様々な音(や気配)が互いにモーフィングされる世界で、Morphoria という名の女性が一人子守唄を歌っている..。

アコースマティックとは、「見ることなしに聴く」という意味を持ち、アコースマティック音楽とは、聴覚のみで表現されるモノメディア、「耳のための映画」とも呼ばれる電子音響音楽のジャンルである。今回の試みでは、ヘッドフォン聴取で擬似的に立体感を感じる方法で作成されたアコースマティック音楽すなわち「耳のための映画」として制作された新作を、会場ではサラウンド(Auro9.1)で、オンライン配信ではヴァーチャル・サラウンドで体感する。尚、配信時には、アーティストの千田泰広のインсталレーション[0.04]が画面に記憶の残像のように現れる。

宮木朝子 Asako MIYAKI(作曲・委嘱作品) P1参照

千田泰広 Yasuhiro CHIDA

1977年神奈川県生まれ。高所登山やアイスクライミングなどのフィールドワークを行い、「空間の知覚」と「体性感覚の変容」を主題にインсталレーション作品を制作。Fête des Lumieres(2021)、Amsterdam Light festival(2017, 2018)、台湾ライトフェスティバルなど、世界最大級のライトフェスティバルに数多く参加。ライトアートの最高峰、Center for International Light Art 観客賞(ウナ、2019)、Wonderspaces、ヘレンハウゼン王宮庭園での展示など、各国を代表する芸術祭や展示にも多数参加。世界の9人のライトアーティストに選出される(Artdex)。現在、長野県辰野町に主要な作品を常設した、空間美術館を建設中。滞在制作するアーティストを募集中。www.chidayasuhiro.com

④ 宮木朝子+小阪淳 《Echolalia - for solo violin, electronics and video》 (2018)

ヴァイオリン：林原澄音 エレクトロニクス：宮木朝子 映像：小阪淳

作品解説：“Echolalia” という架空の妖精 (VOCALOID の音声で表現される) と、彼女が次第に認識してゆく外界の世界の象徴としてのソロヴァイオリンによるシアターピース。“Echolalia” はシャーマニスティックな半生物の妖精で、その肉体はその声の内部に封じ込

められている。盲目の妖精 "Echolalia" は、発する声の反響や残響を手がかりに視覚世界を生み出し、それは実際のスクリーンに映し出されていく。(映像制作:小阪淳) (尚、タイトルの由来となっている"echolalia(反響言語)"とは、精神医学の用語で、自閉症スペクトラムの子どもの治癒に向かうプロセスの中でみられる独自の発声現象を指す。)

この作品は、2018年10月10日東京・スウェーデン大使館オーディトリウムにておこなわれた、アークヒルズ音楽週間 2018 Sweden-Japan Artistic Music Lab 2018 Concertにおいて、ジョージ・ケントロス氏によって初演された。

宮木朝子 Asako MIYAKI(作曲・委嘱作品) P1参照

小阪淳 Jun KOSAKA(映像・委嘱作品) P3参照

林原澄音 Sumine HAYASHIBARA(ヴァイオリン)

久保田良作、ニコラス・ロス、室内楽を、ヴァイオリニスト、ミッシャ・エルマンの専属伴奏者であったジョセフ・サイガーに師事。ロンドン・トリニティー音楽大学を同大学の奨学生を得て、フェローシップ・ディプロマ(最高位演奏家資格)を取得し卒業後は、ミクロシュ・カルテット、ロンドン・ソロイスト・アンサンブルのメンバー。帰国後、国内外で演奏活動を行っている。

メタルヴァイオリン制作:ニコラス・ハーバート Nicolas HERBERT <https://nicolasherbert.tumblr.com>

海外招待作曲家 — マルチチャンネルによるビジュアルミュージック作品

⑤ 石井紘美《Time Crystals》(2021 招待作品・改訂初演)

生口クを始めるようになって五十年近くになる。昔は何かの折に、といえば写真を撮るのが普通だったのだが、私は聴覚人間なので、音による記録の方が身近だった。音質は悪くても、切り取られた時間と音はその時と場面を生き生きと思い起こさせてくれる。それらは、いわば時間の流れを或る部分だけ凍結した結晶のような感じである。この作品では、音のライブラリーのうち30年前の実家の法事の集まりの録音から取った幾つかの断片(様々な声)を素材とした。また、冒頭の鈴のような音は、私の最初のアーティスティック作品『Dreaming Stones』(1999)から転用した。映像の素材は、これも私自身の以前の音響映像作品『Mo's Song』から取ったシークエンスである。このように、この作品では、幾つかの過去の時間から切りとられた音と映像の双方の素材が、耳の中に残る響き、または視覚の残像のように繰り返し、変化してはまた現れる。

石井紘美 Hiromi ISHII (作曲・映像・海外招待作品・ヴィデオレクチャー)

武蔵野音楽大学院修了後、同大学研究員。教職の傍らエクシビションの音楽・音響を手がける。'98年よりドレスデン音楽大学にてW.イエンチに、英国シティ大学にてS.エマーソン、D.スモーリーに師事。同大学より博士号を授与される。ICMC、ガウデアムスなど世界各国で作品が上演され、VideoArtes UNESCO Projectなど委嘱も多い。2006、13-16年ドイツZKM客員芸術家。現在は自身で映像も手がけ Visual Music、また3Dアーティスティックと組み合わせた3D音響映像作品の制作に焦点を当てている。

⑥ ヴィルフリート・イエンチ《The Unknown Planet》(2021 招待作品・改訂初演)

地球は消耗し、大気は汚染され、海には魚がない。世界で最も強力な国々は新しい惑星を見つけるために競争している。将来生き延びるための未知の惑星はどこにあるのだろう?

この作品のアイデアは空間処理に基づいている。惑星の球形構造は、形、色、時間においてさまざまなアルゴリズム的変換がなされモーション・グラフィックスを作り出している。

宇宙的なキャラクターはタイ・ゴングとオーボエの合成音に基づいた電子音響を応用して表現された。音楽は壮大な動きを生み出すように仮想3Dサウンドスペースの中で構築された。

ヴィルフリート・イエンチ Wilfried JENTZSCH (作曲・映像・海外招待作品・ヴィデオレクチャー)

ドレスデン、ベルリン、ケルンにて作曲と電子音楽を学ぶ。'76年からパリ・ソルボンヌ大学にてイアンス・クセナキスに師事。'81年博士号取得と同時にIRCAM、CEMAMUにてデジタル音響合成の研究を指揮。1993-2006年ドレスデン音楽大学作曲科教授及び同大電子音楽スタジオ所長。IMEB Bourges、GRMなど委嘱も多い。彼の音響映像作品はZKM、VMM(Boston&NY)、MusicAcoustica、EMUローマ、シネマフェスト・メルボルン、Seeing Sound Bath、KLGなど様々な機会に上演されている。

【プログラム B】コンサート

「Imaginary Piano-Scape」

日時 2022年8月11日（木）、12日（金）18:30 開演

両国門天ホールのピアノを活かし、その音響を電子的に拡張してゆく作品をプログラミングしたコンサート。国内外の作曲家への新曲委嘱と共に、若手作曲家を対象とした新曲委嘱・作品公募を行います。

また、委嘱作品の一つとしてAI研究の第一人者・大谷紀子氏の監修のもと、AIと人間との共同制作による現代音楽の新作も上演。さらに元GRMの作曲家、現在トゥールーズにて実験的なサウンドパフォーマンス、映像とのコラボレーションで活躍するフランソワ・ドナトを迎え、マルチチャンネルアコースマティック作品の上演と映像出演によるミニレクチャーを行います。

演目

開場時音楽 立体音響でお楽しみください。

● イ・スンギュ 《Tonality generated by 60》（2021 公募入選作品・初演）

① 顧昊倫 《下沈の鯨～ピアノとライブ・エレクトロニクスのための

～Sinking Whales for piano and live electronics》（2022 委嘱・世界初演）

ピアノ・エレクトロニクス：顧昊倫

② チエ・ウジョン 《Where is Topophilia》（2021 公募入選作品・初演）

③ 鈴木悦久 《ピアノの庭遊び～エレクトロニクスとピアノのための一》 （2022 委嘱・世界初演）

ピアノ・エレクトロニクス：鈴木悦久

④ 山口聖斗 《resuscitación》（2021, 公募入選作品・初演）

⑤ 大谷紀子+宮木朝子 AI自動作曲との協働あるいは対立による《Passion in Air》

（2022 委嘱・世界初演）

（原曲 J.S.Bach 平均律クラヴィーア曲 第1巻 24番口短調よりプレリュードとフーガ /Bach 口短調ミサ曲冒頭）

ピアノ・エレクトロニクス：宮木朝子 画像：小阪淳

⑥ 織田理史 《from an ordinary tone》（2021 公募入選作品・初演）

⑦ キム・スア 《反抗》（2021 公募入選作品・初演）

⑧ 水野みか子 《ピアニストと仮想ピアノのための「フードチェインー去りゆく時を重ねて」》

（2021 委嘱作品）

ピアノ：小坂紘未 エレクトロニクス：水野みか子

海外招待作曲家—マルチチャンネルによるアコースマティック作品

⑨ Francois DONATO／フランソワ・ドナト 《We Fight》

（2018 招待作品・改訂初演）

ヴィデオトーク・ミニレクチャー

●イ・スンギュ 《Tonality generated by 60》(2021 公募入選作品・初演) P3 参照

① 顧昊倫 《下沈の鯨～ピアノとライブ・エレクトロニクスのための

～Sinking Whales for piano and live electronics》(2022 委嘱・世界初演)

「想像」というのは未知の感覚世界を探索する原始的衝動であり、抽象的特徴を持つ音楽はさらにその中の最も原始的な存在だと思われる。しかし、固有観念において、音楽は普通に時間的構造に依存し、その存在によって、視聴者は導かれ、作品を理解させていく。想像は違う。考えられたもの、聞かれたもの、見られたものまでにより、時間に頼らず、人間は心で仮想風景を描いたり、膨大な物語を築いたりする。本作品はこの発想をもとに、仮想劇場といった概念と融合し、音色の差異、及び舞台表現によって風景の変化を表す。このような「無進行感」に近い体験はまるで鯨が深海に沈みゆき、緩やかに流れている風景に身を任せ、海流、魚の群れ、星河、チラチラする光と影と流れる音が巨大な体と共に鳴しつつ、残響を生じ、漂っていく。

顧昊倫 Haolun GU (作曲・委嘱作品)

1994年11月中国・蘇州市生まれ、高校1年より作曲を学ぶ。2017年上海音楽学院音楽設計と制作科を首席で修了し、2020年東京藝術大学大学院音楽音響創造科修士課程を修了。現在、同大学院博士課程に在籍。作品は、ニューヨーク電子音響音楽祭、国際コンピュータ音楽会議などに取り上げられているほか、アンサンブル・アッカ 20周年記念コンサート公募入選、世界各国で演奏されている。これまでに作曲を秦毅、尹明五、陳強斌、西岡龍彦、後藤英の各氏に師事。

② チエ・ウジョン 《Where is Topophilia》(2021 公募入選作品・初演)

見えない。

……

草の香りが見える。

そぐ葉が足首を伝って上がってくる。

息を吸う。

冷たい鈴が胸の奥深くにしみる。

体の中を露がかき回し、時々吸収される。

……

びりっとしたにおいが鼻先に沿って染み込む。

冷たくてゆらゆらする感触。

指の関節の間から入ってくる。

私から遠ざかっていったが時々また戻ってくる。

手で掴んでみる。力を入れるほど流れてしまう

そのまま座り込んで少しでも解いてみる。

……

流れに身を任せる。

流されて また、流れてく

これも楽に流れる。

……

息が詰まるような静けさ

せわしく動く動き

肩、肘、太ももをかすめる。

絶え間なく繰り返される、忙しく動く、まるで球体の中に閉じ込められたような

……

存在の感覚に対する積極的肯定で自分を確立する

Topophilia は私の中にいた。

チエ・ウジョン Woojung CHOI (作曲・公募入選作品)

韓国出身のチエ・ウジョンです。現在、洗足学園音楽大学で音楽・音響デザインコースとして在学中です (* 2021年現在)。DJ Meteor という活動名で東京で Live Party を開催し、多様なアーティストたちと一緒に公演をしています。

③ 鈴木悦久 《ピアノの庭遊び－エレクトロニクスとピアノのための一》

(2022 委嘱・世界初演)

楽器演奏には、手順がつきものだ。打楽器であれば左右の手や足の順番、弦楽器であれば指使いやボウイング、ピアノであれば運指など、楽器演奏における手順は、あるフレーズを音楽的に表現する際に非常に重要な事柄になる。私は打楽器を頻繁に演奏するが、左右の手の順序を変えるだけで、表現の方向性をがらりと変えることができるから、いろいろな手順を試す。右左右左、右左右右、左右左左、4つの音が並んだだけでも数通りの手順があり、それぞれでニュアンスが変わってくる。

このように、普通はフレーズがあつて手順を決めていくが、先に手順があつてフレーズが決まるとしたら、どうなるのだろうか。この楽曲は、そんな疑問から作曲した作品である。

この作品で用いるピアノの場合は、運指が演奏する上で重要な手順である。その左右の手の運指の関係性から次の音が選び、その選んだ音の運指からさらに次の音が選ばれる。そうして、ただ淡々と遊んでいるかのような、まるで日が暮れるまでお庭で遊んでいるような、終わりがないアルゴリズムで音楽を作りたいと思った。

鈴木 悅久 Yoshihisa SUZUKI (空間音響設計・システムプランニング・作曲・委嘱作品)

1975年、神奈川県横浜市生まれ。昭和音楽大学で打楽器を、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)で作曲を学ぶ。アルスエレクトロニカ 2006 デジタルミュージック部門ホノラリーメンション賞受賞(オーストリア、Mimiz名義)。コンピュータと自動演奏ピアノを用いたゲームピース「自動演奏ピアノのための組曲」では、第3回AACサウンドパフォーマンス道場にて優秀賞を受賞した。名古屋学芸大学准教授。JSSA先端芸術音楽創作学会運営委員。JSEM日本電子音楽協会理事。

④ 山口聖斗 《resuscitación》(2021 公募入選作品・初演)

仮想とは、事実ではないことを仮にあるものとして考える事である。

私は、「仮想のピアノ」という言葉を、「自分が作ってきた音楽」が新たな肉体を得て、蘇生する機会と受け取り、この曲を制作した。この曲は、過去に、ピアノ以外の音で作った10種類のフレーズをピアノの音源に変え、切り刻み、つなぎ合わせ、逆再生する事で作り上げた。無縁だった10種類の断片が繋がり、音をピアノに変える事で、想像する事しかできなかった自身の曲達の見えなかった顔を見ることが出来る。また、リズムを刻む打楽器の音も過去に録音したピアノの側面を叩いたものである。

この様に、自分が過去に作った曲を寄せ集めて制作する事で、自身のこれまでの履歴を変え、現在と異なる「仮想的な世界、情景」を見る事で、今まで見たくとも見れずにいた現実や己の精神の一側面を見る事と過去の曲たちが新たな音の肉体を得て蘇生する事などを目的にしている。

山口聖斗 Shoto YAMAGUCHI

1996年、愛知県名古屋市生まれ。名古屋学芸大学でサウンドプログラミング、サウンドパフォーマンス、作曲を学ぶ。大学4年時、名古屋学芸大学の有志で結成された『劇団 fooork』で音響として名古屋学生演劇祭に参加し、個人で『名古屋学生演劇祭スタッフ部門奨励賞』を受賞。環境と偶然入ってしまった雑音を用いたミュージック・コンクレート作品「21st Century Outsider」はpetites formes 2020にて入賞する。現在は、会社員の傍、音楽販売サービスサイトに、自身の楽曲を提供している。

⑤ 大谷紀子+宮木朝子 AI自動作曲との協働あるいは対立による《Passion in Air》

(2022 委嘱・世界初演)

(原曲 J.S.Bach 平均律クラヴィーア曲 第1巻 24番口短調よりプレリュードとフーガ /Bach 口短調ミサ曲冒頭)

ピアノ・エレクトロニクス：宮木朝子 画像：小阪淳

Bachのh-moll(口短調)の曲数曲をあるルールで簡易化した状態でAIに学習させ、出力された複数のフレーズが曲の核となっている。

学習されたのは平均律クラヴィーア曲 第1巻 24番口短調よりプレリュードとフーガの一部分のテーマと Bach 口短調ミサ曲冒

頭部分で、この「オリジナル曲」をめぐり、人間が学習し remix という形で出力した部分と、AI の出力したフレーズの解釈がマルチチャンネル空間の中で対峙対峙あるいは並列される。交わることのなかった両者は、モーフィングによって空間内で浸透し合い歪つな受難曲 (passion) を奏で始める。

宮木朝子 Asako MIYAKI (芸術監督・作曲・委嘱作品) P1 参照

大谷紀子 Noriko OTANI (AI 研究)

1995 年東京工業大学大学院理工学研究科情報工学専攻修士課程修了。同年キヤノン (株) 入社。同社情報メディア研究所にて情報検索の研究に従事。2000 年東京理科大学理工学部経営工学科助手、2002 年武藏工業大学環境情報学部情報メディア学科講師を経て、現在は東京都市大学メディア情報学部情報システム学科教授。博士 (情報理工学)。人工知能学会、進化計算学会、情報処理学会、電子情報通信学会、日本 AI 音楽学会、土木学会、AAAI 会員。現在は、進化計算アルゴリズムを自動作曲などに応用する研究に取り組んでいる。

小阪淳 Jun KOSAKA(画像・委嘱作品) P3 参照

⑥ 織田理史 《from an ordinary tone》 (2021 公募入選作品・初演)

現代には膨大の数のソフトウェア・シンセサイザーが存在し、我々は日々その膨大な音色に囲まれている。作曲家・思想家のジョン・ケージが教えてくれたことは、無でさえ音 ("tone") になる、ということである。あらゆるものは音として扱われるし、この事実は単に作曲上のエコノミーのためだけではなく、強靭な表現のためにこそ存在する。私はピアノの C1 音のみを録音し (スマートフォンで録音ストップする際のタップ・ノイズ含む)、この tone から空気感、ドローン、ノイズに至るまで全ての音を引き出した。作品の意図は、「普通の音から」様々な表現を作りことであり、この試みはピアノ音に限定されないであろう。

織田理史 Masafumi ODA (作曲・公募入選作品)

上智大学大学院哲学研究科にてドゥルーズについての修士論文で修士号取得。その後もアカデミックな哲学文献研究と自身によるユニークな哲学的立場の追求との間を自由に横断しながら、電子音楽や映像といった形でその実践ないしアウトプットを試みている。ドイツ、イギリス、イタリア、ベルギー、チリ、アルゼンチン、タイ、中国、ニューヨーク、日本などの各国の芸術祭に参加、入選多数。国際電子音楽コンペティション 2021(中国) にて映像作品「Radical Duality II」入賞。「東京国際思想・芸術クロス」代表。米国作曲家作詞家出版者協会 (ASCAP) 会員。ペンシルバニア州立大学主催音楽祭 2022 にて映像作品「Radical Duality IV」優勝。

⑦ キム・スア 《反抗》 (2021 公募入選作品・初演)

ピアノは鍵盤の圧力によってハンマーが弦を叩き、音が鳴る楽器で、これにより自分の存在を知らしめ、多くの人に愛される。でも私にとってピアノは、あきらめるようになる絶望的で難しい存在だ。このような拒否感が結局、ピアノに向けた虐待につながるが、弦を搔いたり裂いて音を出したり異物を間に入れて本来の音を遮断する。または乱暴に鍵盤をたたく行為でピアノに虐待を加える。しかし、結局は「放置するのがピアノにとって最大の虐待であること」に気付き、音を出す全ての行為を中断するに至った。

キム・スア Kim SUA (作曲・公募入選作品)

韓国に住んでいる 20 歳のキム・スアと申します。高校を卒業して Vic Sound Institute of Music Technology で電子音楽を集中的に勉強しています。日本文化に関心があり、「進撃の巨人」と「呪術廻戦」などの日本のアニメと漫画が大好きです。いつか髪にタオルをのせて温泉も楽しんでみたいです。このごろ更に日本への関心が高まり、ひらがなやカタカナを独学で勉強しています。ひらがなは、マスターしました。具体音楽公募展は、今回が 2 回目です。日本での上演は今回が初めてです。

③ 水野みか子 《ピアニストと仮想ピアノのための 「フードチェインー去りゆく時を重ねて」》(2021 委嘱作品)

地球環境や世界の食糧事情に関する危機感がさけばれている。バランスよく食物連鎖が循環していれば心と身体の健康が保たれるに違いない。食べる、眠る、捨てる、といった動詞が自然の循環をイメージさせる。日常の社会生活を刻む時間が、目に見えない自然循環に支えられているのであれば、そうした二重構造が逆転しているのが音楽なのかもしれない。明確なリズムや拍に支えられて無形の音楽時間が紡がれていく。始まりから終わりへ、以前と以後、正方向と逆方向といった、時間の進展は希薄だ。

水野みか子 Mikako MIZUNO(作曲・委嘱作品)

作曲と音楽学の分野で活動。近作はICMC2017、2018、2019、NIME2021、衛武宮台湾国立芸術センター開館記念演奏会、セントラル愛知交響楽団定演、オーケストラ・プロジェクト2020等で上演されている。北京中央音楽学院、台湾国立交通大学、ソルボンヌ大学、ランス地方音楽院、IRCAM等でマスタークラスやワークショップを実施。日本電子音楽協会会長、名古屋市立大学大学院芸術工学研究科教授。

小坂紘未 Hiromi OSAKA (ピアノ)

「Sonic Arts Festival(台湾)」、「New York City Electroacoustic Music Festival(アメリカ)」、JSSA 音楽祭、ACMP/Media・Project 日韓コンピュータ音楽祭に出演など現代音楽の活動を行う。これまでに円光寺雅彦指揮、桐朋学園アカデミー・オーケストラ、角田鋼亮指揮、東京交響楽団と共に演。

〔海外招待作曲家—マルチチャンネルによるアコースマティック作品〕

⑨ フランソワ・ドナト 《We Fight》(2018 招待作品・改訂初演)

ヴィデオトーク・ミニレクチャー

この作品は、ダニエル・テルッジ氏に捧げられている。共に制作していた数年の間ずっと、無秩序な状態に陥っていた私を彼は望んでサポートしてくれたのだ。

《We fight (我々は戦う)》は、さまざまな性質を持った一連の作品集（その曲数は限定されない）の第二部分で、グローバル化したテクノ＝資本主義社会によってもたらされたある現象を中心にして構成されている。

いずれにせよ、義肢（補綴）技術の指数関数的な発達は一連の状況と社会行動を生み、それによって新しい音環境が生成されていく。音を作りだすオブジェと共に公共／私的空间を占有することもあれば、時空間上に音の増殖を伴う行動の大きな変化を誘発することもある。これは、光の場合でも同じことである。

《We fight》は、この現象に由来する二つの形態の例に特に興味を持っている。すなわち、デジタル・コードの可聴化と、テクノ＝資本主義社会に対する抵抗行動によって生じる音響の生成である。第三の要素はより象徴的、非時間的なもので、格闘技から生じる音は「それらと」一線を画し、作品の展開において構造的機能を担う。

タイトルが示唆しているように、この作品は、素材と構成の両面で、対立と衝突、抵抗について検討したものである。おそらくこの作品は、ふつふつと湧いてくる怒りの痕跡を内に秘めている。

フランソワ・ドナト François DONATO (作曲・海外招待作品・ヴィデオレクチャー)

最初は独学で、さらにポー大学、ジュネーブ音楽院、リヨン国立音楽院で音楽の知識を深めた。

1991年から2005年までINA-GRM (Institut National Audiovisuel -Groupe de Recherches Musicales) のアシスタント・プロダクション・コーディネーターを務めた後、2005年から2017年までトゥールーズを拠点にトゥールーズ大学の School of Art and Design でアコースティック・インタラクティブ・テクニックの講師を務める。現在はトゥールーズ在住で、自らのプロジェクトや他のアーティストとのコラボレーションでアーティストとして活動している。その創造的な歩みは、Musique Concrete から、トランスメディア・パフォーマンスによるインタラクティブなサウンドとオーディオビジュアルのインスタレーションまで、サウンド・アートとデジタル・アートを中心に展開されている。近年では、パフォーミングアーツ (Cie Pal Frenak, Cie Coda Norma, Cie Hypothèse Théâtre, Cie de la Dame)、ヴィジュアルアーツ (インタラクティブなインスタレーションや視聴覚パフォーマンス)、特にヴィジュアルアーティストのゴルナズ・ベルーズニアと定期的にコラボレーションを行っている。INA-GRM、ラジオ・フランス、ベルリンのDAAD、スタジオ・エール、文化省、音楽とデジタル・アートのフェスティバルから委嘱を受けている。音響作

品、ショートオーディオビジュアルのための 12 曲の音楽の著者であり、現在はパフォーマンスとインスタレーションの分野を好んで制作している。2020 年 1 月から 2021 年 7 月まで、トゥールーズの Larrey Hospital で、彼の最新のインタラクティブなサウンドと光のインスタレーション (Time Leaks|Larrey) が展示された。現在は作曲家のエルヴェ・ビロリーニと共に、発明家ニコラ・テスラの姿に焦点を当てた新しい音楽演奏 (2022 年 1 月にメス美術館で初演) や、ドラマーのジャン=クリストフ・ノエルと共に、2021 年 11 月にトゥールーズで制作される演奏プロジェクト Texture (s) に取り組んでいる。アニー・エルノーの著書『Passion Simple』のステージ版 (2023 年 1 月トゥールーズで初演予定) や、拡張リーディング・プロジェクト『Les Immersions』(DRAC Occitanie 2020 の委嘱) での女優コリーヌ・マリオットとのコラボレーションは、意味と感覚の中間体としての声を探求することへの興味を示している。これは、2022 年 3 月に初演されたパフォーマンスプロジェクト「Un matin, s'étirer jusqu'au bout du monde」において、女優のアンヌ・ルフェーヴルや作家のキャサリン・フェットと共に演したことや、アンヌ・ルフェーヴルと共に演した「Mêmesiçabrule」や、アンヌ・ルフェーヴルが指揮する「Compagnie」でのサウンド制作は「Hypothèse Théattr」という会社がプロデュースしたサミュエル・ベケットによるものであることからもわかる。次の作品は 2022 年 9 月、リュブリヤナ (スロヴェニー) の Metelkova Mesto における新しい Time Leaks のインスタレーションとなる。

メッセージ

「私が音の創造 (sound creation) から行う横断的な仕事は常に、グローバル化した社会の中で、芸術的、政治的、技術的なトレンドの間に遭遇する場所と不確実性のある場所を探ろうとする古代の直観に突き動かされています。今日、芸術的な言葉や認識の単純化 / 貧困化に抵抗し、私たちの世界の深遠な傾向に疑問を投げかけることが、私の創造へのコミットメントの中心です。」

翻訳：東川愛 Ai HIGASHIKAWA

専門は音楽学、フランス語圏文化論。1950 年代初期の前衛音楽・電子音響音楽の歴史的・音楽的・美学的なコンテクストを再考する博士論文で博士号を取得 (音楽学、ソルボンヌ大学)。共著に『ミクスト音楽への眼差し——音楽とテクノロジー』(INA-GRM)、日本語の論文に「*Poésie pour pouvoir* (1958) の詩学——H. ミショーから P. ブーレーズへ」等がある。都内の各大学で講師を務める傍ら、2008 年より曲目解説の執筆や翻訳を手がけている。

【プログラム C】基調講演+シンポジウム

「リアルとヴァーチャルの往来 - ゲームと芸術表現について」

日時 2022年8月19日（金）18:30 開始

本フェスティバルを貫くテーマ、内容について、AI研究、聴覚文化論研究、ゲームオーディオ研究、アートディレクション、現代アートの視点から基調講演とシンポジウムを行います。

基調講演（順不同、五十音順）

① 福田貴成（聴覚文化論）

「聴覚メディア経験における〈ヴァーチュアルなもの〉と〈アクチュアルなもの〉」

② 山上揚平（音楽学・ゲームオーディオ研究）

「デジタルゲームにおける音楽・音響の諸相～新しい聴体験メディアとしてのゲームの可能性」

③ 小阪淳（映像・委嘱作品）

「“今”に宿るアバター～図形楽譜の拡張としての偶発的仮想造形」

シンポジウム

「リアルとヴァーチャルの往来」

大谷紀子（AI研究）、福田貴成、山上揚平、宮木朝子、小阪淳

プロフィール

福田貴成 Takanari FUKUTA（聴覚文化論）

聴覚文化論／表象文化論。東京都立大学人文社会学部准教授。共著に『音と耳から考える——歴史・身体・テクノロジー』（細川周平編、アルテスパブリッシング、2021年）、『クリティカル・ワード メディア論』（門林岳史・増田展大編、フィルムアート社、2021年）、論文に「修羅の音を聴く——『シン・ゴジラ』におけるモノとステレオ」（『ユリイカ』（2016年12月臨時増刊号））など。研究活動と並行して音楽レベル ombrophone records（www.ombrophone.net）を主宰、2020年に久保田翠のアルバム『later』（OMBR-0001）をリリース。

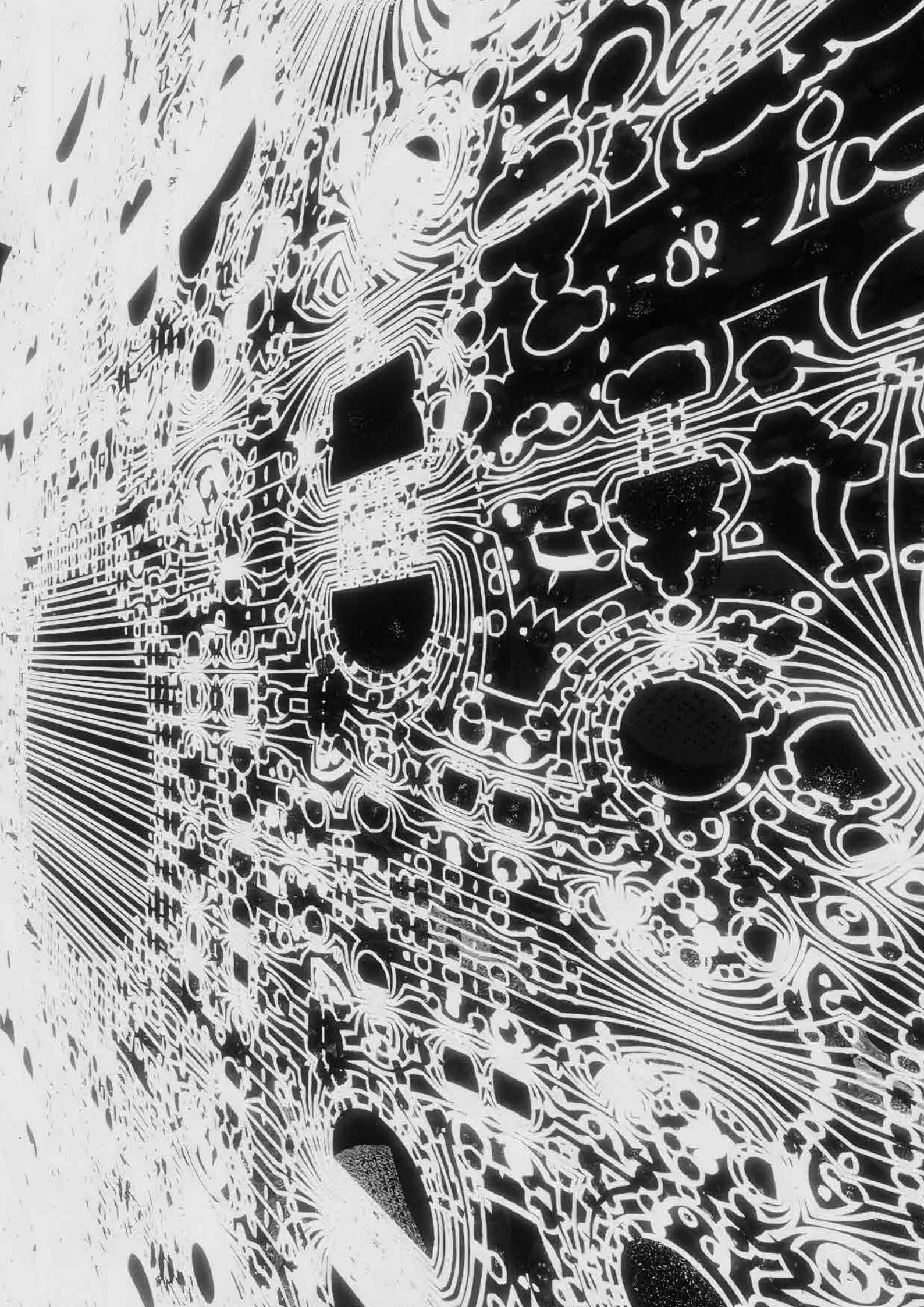
山上揚平 Yohei YAMAKAMI（音楽学・ゲームオーディオ研究）

2011年、フランス近代音楽学の成立を巡る研究で博士号を取得（東京大学総合文化研究科）。東京藝術大学で音楽美学を、跡見学園女子大学、東京都立大学でビデオゲーム・オーディオ等を講義。関連業績に、論文「Formation et développement des cultures autour de la « Geemu Ongaku » (1980-1990)」（Kinephanos N.5, 2015）、共著『〈戦後〉の音楽文化』（戸ノ下達也編著 青弓社 2016）「ゲーム音楽」など。現在は東京大学教養学部附属教養教育高度化機構の特任講師として、アーティストの協力のもとゲームオーディオを含む広義のサウンドデザインを考える実習授業に取り組む。

小阪淳 Jun KOSAKA（映像・委嘱作品）P3参照

大谷紀子 Noriko OTANI（AI研究）P9 参照

宮木朝子 Asako MIYAKI（芸術監督・作曲・委嘱作品）P1 参照





Message from the Artistic Director

Virtual-topia. Have you ever felt a sense of intense nostalgia, suddenly when you hear a certain kind of sound, when you are surrounded by sound, or when you find some scent?

While such a sense at the moment is "real," the "space" associated with the feeling is a virtual existence called "Image," which comes and goes from moment to moment.

According to Philippe Quéau, "virtual" is a derivation of the Latin word "virtus" which means power and energy: it does not mean a fiction contrary to reality but a potential in the object.

The potential creates the "world" linked with images in your brain.

To start with, do we really live in a real space?

Even when AI or VR serves us something originally unintended or returns an error message, the existent technology could move our mind and create a value we can't name.

For human beings, it seems the past and the future are always linked with the present, while our thoughts are constantly flowing and imaginary visions come and go.

Even if a certain expression provides you something extremely distorted, what if your mind is moved by it at the moment?

Live voices versus vocaloids, live sounds versus recorded sounds, sounds played by a human versus electronic sounds – it is meaningless to say which is superior or inferior, or which is intended for a real thing.

That's a space created by misreading of technological products.

A game space, for example, is virtual but it's a sort of "environment."

In the fictional world, game players use their senses - five senses and even another one - and sometimes manipulate the physical sensation of their alter ego.

You can call it the "spirit of exploration," which is one of our primordial desires.

When we enter the unknown world, the essential tools are our own sensory organs, and we could have a perceptual experience which could cross over our five senses.

In this festival, this hall, where the real and the virtual go back and forth, becomes the base of this exploration.

Do you want to experience it right there, feeling the three-dimensional sound, images, and the breath of the live performance, or to explore the space inside your own body created by the virtual surround sound and images that appear through the monitor?

Welcome to your Virtual-topia!

Asako Miyaki Artistic Director of Ryogoku Art Festival 2022

Asako MIYAKI (Artistic Director and Composer)

She is a composer and spatial acoustician. She studied composition, electronic music and acousmonium performance at Toho Gakuen University, INA-GRM and MOTUS and graduated from the Interdisciplinary Cultural Studies Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, and is currently enrolled in the same doctoral course. With contemporary music as a starting point, She conducts sound production and spatial development that connects images, scents, bodies, and unique fields, as well as field work and sound installations in sacred places in the Amami Islands. Her solo album "Virtual Resonance" has been described as "a exquisite and vivid sound image (CD Journal)" "Cosmic Ambient (Beams Records), where Gagaku, Electronica, and Contemporary Music Intersect". She was selected for ICMC (International Computer Music Conference) 2016, 2019 and New York City Electroacoustic Music Festival 2019, and won the first prize of "Ryuichi Sakamoto | Installation Music Exhibition Contest" for her 5.1 ch surround sound work (Afterimage). For KONICA MINOLTA Planetaria Tokyo's "Hoshizora Lounge", She is continuing the space acoustic exhibition "22.2 ch Remix of J.S.Bach Well Tempered Clavier" as a long-term project.

Program A

concert "Yadori_avatar"

August 9th (Tue), 10th (Wed) 2022, 18:30 Start

Contemporary music in a real-time performance and an online distribution - Game play as a modern art = Composed mainly of new works of performance.

A new collaboration between Asako Miyaki's music and game or VR videos will be performed.

Throughout the night, we will engage in visual-aural encounters, reenacting their ways, as well as expressing "the traffic between real and virtual".

In addition, we will be hosting a mini lecture featuring visual music performances and video appearances by a guest composer from Germany-Hiromi ISHII of ZKM and composer Wilfried JENTZSCH, former director of the electronic music studio at University of Music Dresden.

Program

Introduction : Please enjoy the 3D sound when the hall opens.

- YI SEUNGGYU 《Tonality generated by 60》 (2021, Publicly selected works and premieres)
- ① Jun KOSAKA + Asako MIYAKI 《Yadori_Scape_Notation》 - for video game and saxophone player (2022, Commissioned and world premiere)
saxophone : Masanori Oishi video : Jun KOSAKA music and electronics : Asako MIYAKI
- ② Fusako BABA + Asako MIYAKI 《Hidden Garden - for VR video and virtual surround music》 (2022, Commissioned and revised premieres)
video : Fusako BABA music : Asako MIYAKI
- ③ Asako MIYAKI 《Opera acousma III - Morphoria》 (2022, Commissioned and world premiere)
acousmatic music by multi channel work
installation (*video for distribution) : Yasuhiro CHIDA
- ④ Asako MIYAKI + Jun KOSAKA 《Echolalia – for solo violin, electronics and video》 (2018, revival)
violin : Sumine HAYASHIBARA music and electronics : Asako MIYAKI video : Jun KOSAKA
metal violin making : Nicolas Herbert

invited composer- Visual music by multi channel work

- ⑤ Hiromi ISHII 《Time Crystals》 (2021, Invited works and revised premiere)
- ⑥ Wilfried JENTZSCH 《The Unknown Planet》 (2021, Invited works and revised premiere)
video lecture

Introduction

● YI SEUNGGYU 《Tonality generated by 60》

(2021, Publicly selected works and premieres)

In the C key, the seven modes have the same compositional sound, but the notes have different roles within the mode because they are spaced apart from each other. The computer presents Tonality one by one from the Middle C note (MIDI Pitch 60) on the piano in the C key. The key has a limited note, but if you look at the note from a number's point of view, not from a point of view, you will eventually use all 1, b2, 2, b3, 3, 4, b5, 5, b6, 6, b7, and 7. Each note has one Tonality and outputs it with Ambient Sound as computing. Tonality is determined according to the notes presented by the computer, and an acoustic space is created by overlapping or meeting each other by computer sound.

YI SEUNGGYU

YI SEUNGGYU is a Korean electronic musician based in Japan. He approaches sound in a raw manner, combining analog modular synthesizers and computer programming than differentiating them. Through dismantling musical formation, Yi explores what experiences sound can give listeners, whether it is more musical experience or acoustic.

He has been studying at Kyushu University since 2019.

With the appearance of "GIGAMODULAR" hosted by doravideo (Yoshimitsu Ichiraku) in November 2020, music activities began in Japan.

"2021 GIGAMODULAR Okayama" "2020 KFoM (Kansai Festival of Modular)" "2021 GIGAMODULAR Tokyo"

"2021 SICKHAUS (Kentaro from Number Girl) & Taro Aiko (from ENDON / M.A.S.F) Fukuoka Live"

① Jun KOSAKA + Asako MIYAKI

《Yadori_Scape_Notation》 - for video game and saxophone player

(2022, Commissioned and world premiere)

video : Jun KOSAKA music and electronics : Asako MIYAKI saxophone : Masanori OISHI

As a "virtual landscape," the video is projected as an actual searchable environment created by the VR game engine.

When abstract objects appear in the virtual Monten Hall, the game = performance starts, and the SAX player performs the game play = performance in real time.

The player is positioned as an "avatar" in a state where the composer's intention "resides", and "searches" the space of the game by performing acts, and "extends" the events and things there.

The connection between real space and virtual space is triggered by perceptual disturbances on the part of the observer.

For all involved, this performance will be an experience thrown into the complex relationship between visual, auditory, and somatic uncertainties and psychological states manipulated by perceptual stimuli.

Jun KOSAKA (visual director and video)

Artist, 2006: Japan Media Art Festival, jurors' recommended work 2006: produces four works for permanent exhibition at Sony Explora Science (Beijing) 2006: joins "One for every Household: Diagram of Our Universe" production committee 2007: Cannes Lions 2007 International Advertising Festival, Cyber Lions Bronze from 2009: visual works for the "Rondan Jihyou" column in the Asahi Shimbun newspaper 2011: participates in group exhibition "Beyond the Naked Eye" at Tokyo Photographic Art Museum, who purchase his exhibit "VIT 2.0" 2014: joins "Diagram of Our Solar System" production committee 2015: joins "Diagram of Light" production committee 2018: selected for the Tanegashima Space Art Festival 2020: the collaboration work with Asako MIYAKI, "Echolalia II," was selected and screened at the Society for Arts and Technology (Canada)

Masanori OISHI (saxophone)

Receiving his undergraduate and master's degrees from the Tokyo National University of Fine Arts and Music (now Tokyo University of the Arts), Oishi went to France to study at the Conservatoire National Supérieur de Musique de Paris in 2001. He graduated with top honors (mention très bien) in saxophone, chamber music, and free improvisation. The same year he advanced to the school's 3rd level Chamber Music Course (Classe de Musique de Chambre, 3e cycle de perfectionnement), completing it in 2007. From 2002 to 2004 he studied on a research grant from Japan's Agency for Cultural Affairs in their Program of Overseas Study for Upcoming Artists.

Before returning to Japan in 2008, Oishi played not only in France, but in various countries in Europe, Africa and Asia.

His participation in the Tokyo Opera City Cultural Foundation-sponsored recital series

B → C 100 garnered him high acclaim. Subsequently, he appeared in such events as the Tokyo Opera City Cultural Foundation Composium, the Suntory Foundation for Art' Summer Festival, and the Takefu International Music Festival. He also appeared in 2008 in a dance collaboration at the late Pina Bausch's dance festival in Germany (Internationale Tanzmesse NRW).

He has worked extensively, focusing on contemporary and classical music, but also playing concerts, on television and radio, in addition to recording music for commercials. He has released two solo albums "NO MAN'S LAND Masanori Oishi plays JacobTV" and "SMOKE Japanese saxophone solo works". "SMOKE" was received an Excellence Award of Japan agency for Cultural Affairs National Arts Festival. His contemporary music group, Tokyo Gen'On Project received the 13th Saji Keizo Prize. He is a Specially Appointed Associate Professor at Osaka College of Music and a Lecturer at Tokyo National University of fine Arts and music, Senzoku Gakuen College of Music, and Elisabeth University of Music.

② Fusako BABA + Asako MIYAKI

《Hidden Garden - for VR video and virtual surround music》

(2022, Commissioned and revised premieres)

video : Fusako BABA music : Asako MIYAKI

This work is originally an immersive content work with full dome video and surround music, reassembled for VR video and virtual surround.

This work won the Yaroslavl Best Artistic Show-Prize at the International fulldome festival "Reflections of the universe" (Yaroslavl, Russia) and the top prize in the short film category at the International Science and Film Festival in February 2019.

It was produced as one of the series of "walking in the brain" in which "each person experiences the garden of the afterimage in the brain". A work in which the viewer is the only character wandering around in a virtual garden.

In distribution, VR and virtual surround version.

In the venue, it will be performed with video and a surround version by Auro 9.1 ch.

Fusako BABA(video)

Fusako Baba is a visual artist who mainly produces fulldome art. Her artworks won several awards Germany, Russia and Japan. Recently, she has also been creating 360° VR video works. She uses the symmetric expression as her unique style. It depicts beautiful and emotional landscapes. She also makes fulldome environmental videos for exhibitions and events in Japan.

③ Asako MIYAKI 《Opera acousma III - Morphoria》

(2022, Commissioned and world premiere)

acousmatic music by multi channel work installation (*video for distribution): Yasuhiro CHIDA

In a world where various sounds are morphed into each other, a woman named Morphoria is singing a lullaby alone.

Acousmatic music has the meaning of "listening without seeing," and acousmatic music is a genre of electronic acoustic music called "movies for the ears," which is monomedia that is expressed only by hearing. In this trial, you will experience acousmatic music created by a pseudo-stereoscopic method of listening by headphones, that is, a new work created as a "movie for the ear", in surround (Auro 9.1) at the venue and in virtual surround in online distribution. At the time of distribution, artist Yasuhiro Chida's installation [0.04] appears on the screen like an afterimage of a memory.

Asako MIYAKI (P15)

Yasuhiro CHIDA (installation in video)

Born in 1977 in Kanagawa, Japan. Creates immersive art installations on the themes of "the consciousness of space" and "the transformation of somatic sensation," which are based on his experiences from such activities as high-altitude mountain climbing and ice climbing.

Recent major activities include: Fête des Lumieres (2021), Taiwan Light Festival (2021), International Light Art Award 2019 (Unna, Germany; one of the three Finalists; received the Audience Prize.); Kunst Fest Spiele (2020, Hannover, Germany); Luminale (2020 Frankfurt, Germany); Wonderspaces (2019 – , USA); Amsterdam Light Festival (2017, 2018).

His name was cited in the website Artdex, in the article "Ever-Renewing Power of Light Art: 9 Brilliant Light Artists You Need to Know" (2019). Currently building his art museum "Museum of Spatial Art" in Tatsuno, Nagano, Japan and calling artists for a residency program.

④ Asako MIYAKI + Jun KOSAKA 《Echolalia – for solo violin, electronics and video》

(2018, revival)

music : Asako MIYAKI video : Jun KOSAKA violin : Sumine HAYASHIBARA

This work is a kind of theatre piece involving a musical performance by a fictitious fairy called Echolalia (represented by a Vocaloid synthesised voice) and a solo violin which symbolises the outside world that she gradually recognises. Echolalia is a kind of shamanistic fairy situated somewhere between a machine and a human being. She exists only in the form of a voice; her body is contained within her voice. The blind Echolalia uses the events of the auditory world to create a visual world that is reflected on the screen during performance (video by Jun Kosaka). The title, 'echolalia', is taken from a term used in psychiatry. It describes a type of vocal phenomenon that is seen in children on the autism spectrum during their healing process. Echolalia was first performed by George Kentross on 10 August 2018 at the Sweden-Japan Artistic Music Lab 2018, held in the auditorium of the Swedish Embassy in Tokyo as part of the Ark Hills Music Week.

Asako MIYAKI (P15)

Jun KOSAKA (P17)

Sumine HAYASHIBARA (violin)

Sumine Hayashibara studied violin with Ryosaku Kubota and Nicholas Roth and chamber music with Joseph Seiger, who was the official accompanist for Mischa Elman. She obtained a scholarship to attend Trinity College of Music in London, where she was awarded a Fellowship diploma. While in London she was a member of the London Soloists' Ensemble and also leader of the Miklós Quartet. Since her return to Japan she has been giving many concerts as a soloist and chamber music player, both here and abroad, which have included the first performances of several contemporary pieces.

invited composer - Visual music by multi channel work

⑤ Hiromi ISHII 《Time Crystals》

(2021, Invited works and revised premiere)

It has been almost 50 years since I started my hobby live-recording. In the old days, it was normal to take pictures at some point, but since I am an 'auditory' person, recording by sound was more familiar.

Even if the sound quality is poor, the time and sound that are cut out remind us of the time and scene. They are, so to speak, crystal-like things in which the flow of time is frozen in part. In this work, I used some fragments - various voices taken from a recording of a gathering of Buddhist memorial service at my parents' house 30 years ago - from my 'library' as materials.

Also, the bell-like sound used at the beginning is taken from the last sound of "Dreaming Stones" (1999), which was my first acousmatic composition.

The visual material is also a sequence taken from my own previous audio-visual work "Mo's Song".

Thus, in this work, both sound and visual materials, cut from some past time, repeat, change, and reappear, like the echoes which remain in the ear, or visual afterimages.

Hiromi ISHII (video, composition)

was born and studied composition in Tokyo. Research Fellow at Musashino Musical College. She composed for exhibitions whereas taught at academic institutes. From 1998 she studied electroacoustic composition under W. Jentzsch at Musikhochschule Dresden, further with S. Emmerson and D. Smalley at City University London where she was conferred her PhD with thesis „Composing Electroacoustic Music relating to Traditional Japanese Music“. Her works have been presented at festivals worldwide such as ICMC, Gaudeamus, including commissions by Saxony State (premiered at Semper Opera House), UNESCO Project by Video Artes. In 2006 (ZKM grant), 2013 - 16, she was Guest Composer at ZKM. Her recent works focus on 3D Acousmatic and Visual Music. <http://hiromi-ishii.de>

⑥ Wilfried JENTZSCH 《The Unknown Planet》

(2021, Invited works and revised premieres)

Exhausted is the Earth, polluted is the air, no fishes in the ocean. The most powerful countries in the world compete to find a new planet. Where can we find the unknown planet to survive in the future?

The idea of this piece is based on space transformation. The spherical structure of the planet was transformed in form, color, and time using various algorithmic transformations to generate motion-graphics. The cosmic character was expressed applying electroacoustic sounds based on the synthesis of Thai-gong and oboe. The music was designed in a virtual 3D sound space to create a spectacular movement.

Wilfried JENTZSCH (video, composition)

He studied composition at the Musikhochschule Dresden, Berlin, and electronic music at Cologne. From 1976 -81 he studied at the Sorbonne Univ. Paris under Xenakis where he was conferred his degree of doctorate whereas conducted a research of digital sound synthesis at IRCAM and the CEMAMu. 1993-2006 he was professor of composition and the director of the Electronic Studio at the Musikhochschule Dresden. His works have been presented worldwide such as at ZKM, VMM Boston&NY, MusicAcoustica, EMU Rome, Cinemafest Melbourne, Seeing Sound Bath, KLG, including commissions by IMEB Bourges, GRM.

Program B

concert “Imaginary Piano-Scape”

August 11th (Thu), 12rd (Fri) 2022, 18: 30 Start

This is a concert that uses the piano of Ryogoku Monten Hall to show a programmed work which electronically expands the sound.

In addition to commissioning new compositions from composers in Japan and abroad, we also invite young composers to submit new compositions and works for consideration.

Also, as one of the commissioned works, under the supervision of leading AI researcher Otani, a new piece of modern music produced jointly by AI and humans will be performed

In addition, former GRM composer Donato, who is currently active in experimental sound performance and collaboration with video in Toulouse, will perform multi-channel acoustical works and give a mini-lecture with video appearances.

Program

Introduction : Please enjoy the 3D sound when the hall opens.

● Introduction. YI SEUNGGYU 《Tonality generated by 60》
(2021, Publicly selected works and premieres)

① Haolun GU 《Sinking Whales for piano and live electronics》
(2021, Commissioned and world premiere)

piano/electronics : Haolun GU

② Woojung CHOI 《Where is Topophilia》 (2021, Publicly selected works and premiere)

③ Yoshihisa SUZUKI 《Playing in the garden of piano for electronics and piano》
(2021, Commissioned and world premiere)

piano/electronics : Yoshihisa SUZUKI

④ Shoto YAMAGUCHI 《resuscitación》
(2021, Publicly selected works and premiere)

⑤ Noriko OTANI + Asako MIYAKI

《Passion in Air》 ~ In collaboration with or in conflict with AI automatic composition
(2022, Commissioned and world premiere)

original work J.S.Bach Well Tempered Clavier 1 No. 24 BWV869 h-moll / Mass in B Minor

piano/electronics : Asako MIYAKI images : Jun KOSAKA

⑥ Masafumi ODA 《from an ordinary tone》
(2021, Publicly selected works and premiere)

⑦ Kim SUA 《defiance》 (2021, Publicly selected works and premiere)

⑧ Mikako MIZUNO 《Foodchain ver.2》
(2021, Commissioned and revised premiere)

piano : Hiromi OSAKA electronics : Mikako MIZUNO

invited composer - acousmatic music by multi channel work

⑨ François DONATO 《We Fight》
(2018, Invited works and revised premiere)

video lecture

Introduction

● YI SEUNGGYU 《Tonality generated by 60》

(2021, Publicly selected works and premieres)

(P17)

① Haolun GU 《Sinking Whales for piano and live electronics》

(2021, Commissioned and world premiere)

"Imagination" is a primitive urge to explore the unknown sensory world, while music, as an abstract thing, is probably has the most primitive features among them. However, in a "traditional" opinion, music usually depends on the temporal structure, and which is that structure guides listeners to understand the piece. But imagination is different. Depending on what we thought, what we heard, and even what we have seen, we could draw virtual landscapes or build enormous tales within our mind, regardless of time. Based on this idea, this piece fuses with the concept called "virtual theatre", and shows the changing of "landscapes" through timbre differences and stage performance. This "non-progression-like" experience is just like a whale sinking into the deep ocean, and all the landscapes are flowing around. Ocean currents, fish flocks, milky way, flickering light and shadows and floating sounds resonating with that huge body. Producing reverberation and echo, and drifting away.

Haolun GU

Born in Nov. 1994, a native of Soochow, China.

GU is a composer and pianist, received his Bachelor's degree from Shanghai Conservatory of Music in 2017, and completed his Master degree in Tokyo University of the Arts in 2020. Now he is a Ph.D student in Tokyo University of the Arts. He has studied composition with Yi Qin, Mingwu Yin, Qiangbin Chen, Tatsuhiko Nishioka, and Suguru Goto. His works have been selected by international electronic music festivals such as NYCEMF(2020), ICMC(2020/2021), as well as Ensemble H 20th anniversary concert "Hiroshima and music"(2020), etc., and performed in multiple countries.

② Woojung CHOI 《Where is Topophilia》

(2021, Publicly selected works and premiere)

Can't see.

.....

See the scent of grass.

A blade of grass fluttering in the breeze came up along my ankles.

breathe in.

A cold drop penetrated deep into my heart.

Dew ripples throughout the body and is sometimes absorbed.

.....

A pungent smell sting nose.

It feels cold and wobbly.

It comes in between the knuckles.

It walked away from me, but sometimes comes back.

Squeeze it with my hands.

It flows between my hands and disappears.

Sit down and feel a little more.

.....

Give myself up to the wave.

Swept away, As it is

It's flowing.

.....

suffocating silence

bustling movement

scratch my shoulders, elbows, and thighs.

It's been repeated, it's been busy, It's like being trapped in a sphere.

.....

Establishing myself as an active positive for the sense of existence.

Topophilia was in me.

Woojung CHOI

I am Woojung Choi from Korea.

Currently, I am majoring in music design in the Senzoku Gakuen College of Music *(as of 2021).

Under the name of DJ Meteor, I am holding a Live Party in Tokyo and performing with various artists.

③ Yoshihisa SUZUKI 《Playing in the garden of piano for electronics and piano》

(2021, Commissioned and world premiere)

To play a musical instrument, we must learn the methods of each musical instruments. Method in instrumental playing becomes a very important matter in the musical expression of various phrases. For example, the order of the left and right hands and feet in percussion instruments. Fingering and bowing on stringed instruments and Fingering on the Piano. I try different methods when I play percussion, because different methods bring different expressions. There are several different methods for the four notes alone, each with different nuances. For example, right-left-right-left, right-left-right, right-left-left-left, right-left-left-left, right-left-left-left, right-left-left-left-left. In this way, there is usually a phrase and then the procedure is decided. However, my question is to swap the relationship between the method and the phrase. This piece was composed based on the question of the relationship between method and phrase. In the case of the piano used in this piece, piano fingering is an important method for playing. The next note is selected based on the relationship between the fingering of the left and right hands, and the next note is further selected based on the fingering of the selected note. I think that, I want to make music with the algorithm that has never end, as if I am just playing, as if I am playing in the garden until the sun goes down.

Yoshihisa SUZUKI (spatial acoustic design, system planning and composition)

Yoshihisa Suzuki, a percussionist, and composer, was born in Yokohama, Japan in 1975. He studied percussion instrument was majored at Showa university of music (1994-1998) and is studying composition at Institute of Advanced Media Art and Sciences (IAMAS, 2002-2005). He received the ARS Electronica (Linz, Austria) 2006 digital music Honorary Mention (Mimiz). He received an award of excellence at the 3rd AAC Sound Performance competition for "Suite for Disklavier", a game piece using a computer and a diskklavier. He is member of Japanese Society of Electronic Music (JSEM) and Japanese Society for Sonic Arts (JSSA).

④ Shoto YAMAGUCHI 《resuscitación》

(2021, Publicly selected works and premiere)

Virtual means to think of something that is not true as something that is temporary.

I took the term "virtual piano" as an opportunity to revive the "music I have created" by giving it a new body, and created this piece.

This piece was created by converting 10 different phrases made in the past with sounds other than piano into a piano sound source, cutting them up, joining them, and playing them backwards. By connecting these ten unrelated fragments and changing the sound to piano, I was able to see the unseen face of my own songs that I could only imagine. The rhythmic percussion sound was also created by striking the side of the piano that I had recorded in the past.

In this way, by creating a collection of songs that I have written in the past, I aim to change my past history, and by looking at a "virtual world and scene" that is different from the present, I aim to see an aspect of reality and my own spirit that I have been unable to see even if I wanted to, and to revive my past songs with a new sound body.

Shoto YAMAGUCHI

Born in Nagoya City, Aichi Prefecture in 1996. Studied sound programming, sound performance and composition at Nagoya Gakugei University. In his fourth year at university, he participated in the Nagoya Student Theater Festival as a sound engineer for the theater company fooork, which was formed by volunteers from Nagoya Gakugei University, and won the "Nagoya Student Theater Festival Staff Section Encouragement Award" as an individual.

His music concrete work "21st Century Outsider", which uses the environment and accidental noise, won a prize at petites formes 2020.

Currently, while working as a company employee, he is providing his own music for a music sales service website.

⑤ Noriko OTANI + Asako MIYAKI

《Passion in Air》 in collaboration with or in conflict with AI automatic composition

(2022, Commissioned and world premiere)

original work J.S.Bach Well Tempered Clavier 1 No. 24 BWV869 B Minor, Mass in B Minor

piano/electronics : Asako MIYAKI images : Jun KOSAKA

The AI learns a few songs of Bach's h-moll in a simplified form with a rule, and these multiple phrases are the core of the song. In this song, the theme of a part of Well Tempered Clavier 1 No. 24 BWV869 h-moll Prelude and fuga, and the beginning of Mass in B Minor were learned by AI. For these "original songs," the parts that humans learn and output in the form of remixes and the interpretations of the AI's output phrases are confronted or paralleled in a multi-channel space. The two, which never meet, penetrate the space by morphing and begin to produce a distorted Passion.

Asako MIYAKI (P15)

Noriko OTANI

Completed the master's program of the Computer Science Course, Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology in 1995. Joined Canon Inc. in the same year, and engaged in research of information retrieval at the Information Media Laboratory. Assistant in the Department of Management Engineering, Faculty of Science and Technology, Tokyo University of Science since 2000. Lecturer in the Department of Information Ecology Studies, Faculty of Environmental and Information Studies, Musashi Institute of Technology since 2002. Professor in the Department of Information Systems, Faculty of Informatics, Tokyo City University since 2014. Ph.D. (Information Science and Engineering). Member of JSAI, JSEC, IPSJ, IEICE, JAEMS, JSCE and AAAI. Currently, she is working on application of evolutionary computation algorithms, especially automatic music composition.

Jun KOSAKA (P17)

❶ Masafumi ODA 《from an ordinary tone》

(2021, Publicly selected works and premiere)

As we all know, a huge amount of software synthesizer and its tones have arisen, so we are surrounded by a large variety of tones.

What Cage taught us is that even nothingness could be a tone.

Anything will be treated as tone, and this is not merely for compositional economy but for strong and condensed expression.

So I just recorded the tone "Do" of my piano, including even record-stop-noise, then modulated that over and over, so every sound which contains the atmospheric, drone, and even noise was made by this single tone.

My intention is creating a variety of sounds "from an ordinary tone".

This attempt could not be limited by such piano sound, but will be developed into the vast horizon of music expressions.

Masafumi ODA

Born in Saitama, Japan, in 1986. Enrolled in Department of Philosophy, Sophia University. Having got master's degree by writing a master's thesis about Deleuze's philosophy. After graduated, crossing between academic philological studies and investigation of philosophically unique position of myself, and trying to output these results as performance, electronic music, digital video work, and recently, "Application Art" which is a synthesis of programming, 3D modelling, visual and music elements and so on. Participated in many international music and art festivals with music, audio- visual pieces, performances, and paper presentations in US, Italy, German, Belgium, England, Korea, China, Thailand, Argentina, Chile, NY, and Japan. My audio-visual piece "Radical Duality II" was awarded at International Electronic Music Competition 2021 (China). A member of ASCAP. My audio-visual work "Radical Duality IV" became the winner of Penn State Living Music 2022, hosted by The Pennsylvania State University. Official HP: <https://www.masafumi-rio-oda.com/>

❷ Kim SUA 《defiance》

(2021, Publicly selected works and premiere)

The piano is an instrument in which a hammer knocks on a string under the pressure of the keyboard, thereby promoting its existence and being loved by many people. But for me, piano is a hopeless and difficult thing to give up. This reluctance eventually leads to abuse toward the piano, but scratches or tears the string to make a sound, or puts foreign substances between them to block the original sound. Or abuse the piano by violently tapping the keyboard. However, in the end, he realized that "Leaving it unattended is the greatest abuse for the piano" and stopped all acts of making sounds.

Kim SUA

She is a 20-year-old student living in Korea and is studying electronic music intensively at the "Vic Sound Institute of Music Technology." She is interested in Japanese culture and loves Japanese animations and cartoons such as "Attack on Titan." One day, she thought she wanted to put a towel on her head and enjoy the hot spring. This is the second music contest. This is the first time performing in Japan. artists.

❸ Mikako MIZUNO 《Foodchain ver.2》

(2021, Commissioned and world premiere)

Facing the critical phase of global environment and foodchain, good health balance can be maintained based on eating, sleeping and appropriate disposing. The measurable time passing in the ordinary peaceful life is supported by invisible circulation of nature. Oppositely the unshaped musical time is supported by the measured time of beat and tempo. The framework of time from the beginning towards the end, the time before/after, forward and reverse etc., being said to be <development of time>, are dilute in the nature of music.

Mikako MIZUNO

Composer/musicologist. Invited researcher of Université Sorbonne (2016). Her pieces have been heard in a lot of locations including France(Bourges, Paris, Reims), Germany(Berlin, Köln), Austria(Salzburg, Linz, Vienna), Hungary(Budapest), Italy(Venice, Alba, Treviso, Udine) , Republic of Moldova, ISEA, ISCM, EMS, Musicacoustica, ACMP, WOCMAT, NIME2021, ICMC(2017,2018,2019,2021), also performed by Tokyo Symphony Orchestra, Central Aichi Symphony Orchestra etc. President of the Japanese Society of Electronic Music (JSEM), board member of ICMA(International Computer Music Association), Japanese Society for Sonic Arts(JSSA), Meta-Xenakis consortium, Nagoya Philharmonic Orchestra. Dean and Professor of the School of Design and Architecture at Nagoya City University.

Hiromi OSAKA

Hiromi Osaka received a Master's Degree at Toho Gakuen Graduate School in 2019.

She won third prize at the 11th Burckhardt International Piano Competition in 2011. In 2017, she performed the piano concerto No.1 by Tchaikovsky and No.2 by Prokofiev conducted by Masahiko Enkoji with the Toho Academy Orchestra.

In 2021, she performed with the Tokyo Symphony Orchestra in "Orchestra Project 2020".

invited composer - acousmatic music by multi channel work

⑨ François DONATO 《We Fight》

(2018, Invited works and revised premieres)

"We fight" is the second part of a cycle of works of various kinds, the number of which is not limited and which revolve around certain phenomena induced by the globalized techno-capitalist society. This cycle is called *Chronicles of Ordinary Erasure*.

In one way or another, the exponential development of technological prostheses produces a set of social situations and behaviors that generate new sound environments. Either directly by colonizing public and private space with sound-producing objects, or by inducing behavioral mutations that involve the increased production of sounds in space and time. The same is true of light.

"We fight" is more specifically interested in two cases of figures from this phenomenon: the sonification of the computer code and the sound productions generated by the actions of resistance to the techno-capitalist society. A third element, more symbolic, more timeless, the sounds of combat sports, allows for distance-taking and assumes structural functions in the play.

As its title suggests, this work works on confrontation, resistance both in terms of its materials and its construction. It may be carrying a trail of growing anger...

François DONATO

Initially self-taught, he deepened his musical knowledge at the University of Pau, the Conservatory of Gennevilliers and the National Conservatory of Lyon.

He was responsible for production at the Groupe de Recherches Musicales (Paris) from 1991 to 2005, then with the éOLE (Toulouse) composers' collective from 2005 to 2017. Lecturer at the University of Toulouse le Mirail, Department of Plastic Arts Applied Arts on sound and interactivity techniques from 2007 to 2012.

Living in Toulouse, he now works as an independent artist on personal projects or in collaboration with other artists.

His creative path develops around sound arts and digital arts, from Musique Concrète to interactive sound and audiovisual installations through transmedia performance.

He has collaborated regularly with the performing arts (Cie Pal Frenak, Cie Coda Norma, Cie Hypothèse Théâtre, Cie de la Dame), and the visual arts (interactive installations and audiovisual performances) notably with the visual artist Golnaz

Behrouzna in recent years.

He has received commissions from the G.R.M., Radio France, the DAAD of Berlin, the Studio éOle, the Ministry of Culture and several festivals of music and digital arts.

Author of acousmatic pieces, a dozen music for the show and the audiovisual, he favors today the fields of performance and installation.

His latest interactive sound and light installation (Time Leaks | Larrey) was exhibited at the Larrey Hospital in Toulouse from January 2020 to July 2021.

He is currently working with the composer Hervé Birolini on a new musical performance focusing on the figure of the inventor Nikola Tesla (premiere in January 2022 at the Arsenal de Metz), as well as with drummer Jean-Christophe Noël on the performative project Texture(s) which will be created in November 2021 in Toulouse.

His collaborations with actress Corinne Mariotto, on a stage version of Annie Ernaux's book, *Passion Simple* (premiere planned in January 2023 in Toulouse) and on the augmented reading project *Les Immersions*, (musical commission by DRAC Occitanie 2020) show his interest in exploring the voice as an intermediary between the meaning and the sensory.

This is also demonstrated by his involvement with actress Anne Lefèvre and author Catherine Phet in the performative project *Un matin, s'étirer jusqu'au bout du monde* which will be premiered in March 2022, the performance *Même si ça brûle* with Anne Lefèvre or the work of sound creation that he leads on Compagnie, by Samuel Beckett, produced by the company Hypothèse Théâtre. His next creation will be a new Time Leaks installation at Metelkova Mesto in Ljubljana (Slovénie) in September 2022.

-message-

The transversal work that I carry out from sound creation is always motivated by an ancient intuition that pushes me to seek places of encounter and uncertainty between the artistic, political and technological trends at work in our globalized society. Today, resisting the simplification/impoverishment of artistic language and perception and questioning the profound tendencies of our world is the heart of my commitment to creation.

translation : Ai HIGASHIKAWA

Musicologist/Docteur (Sorbonne University). Research abroad at IReMus of Sorbonne University supported by JSPS (2017-2018). Her Ph. D. thesis focused on the study of Pierre Schaeffer's archives documenting the beginning of *musique concrète* as well as the manuscripts and sketches of Pierre Boulez's early electroacoustic music, offering a reconsideration of the historical, musical, and aesthetic background of the electroacoustic music of the 1950s. Her articles are published in *Regards sur les musiques mixtes: Musique et technologie* Portrait Polychromes no 23 (INA-GRM) and *Mitteilungen der Paul Sacher Stiftung*. She specializes in contemporary and electroacoustic music, as well as in French cultural studies. Since 2018, she works as an Adjunct Lecturer at several universities in Tokyo.

Program C

August 19th (Fri) 2022, 18:30 Start

“The traffic between real and virtual - about games and artistic expression”

Keynote lectures and symposiums will be held on the themes and contents of the festival from the viewpoints of AI research, auditory culture research, game audio research, art direction, and contemporary art.

keynote speech

① Takanari FUKUTA

“The Virtual and the Actual in Auditory Media Experiences”

② Yohei YAMAKAMI

“Music and Sounds in Digital Games : The Potential of Videogames as a Media for New Listening Experiences”

③ Jun KOSAKA

“Avatars Inhabiting the present moment : Contingent Virtual Shaping as an Extension of Graphic notation”

symposium

“The traffic between real and virtual”

Noriko OTANI Takanari FUKUTA Yohei YAMAKAMI Asako MIYAKI Jun KOSAKA

Profile

Takanari FUKUTA

He teaches in the Department of Humanities at Tokyo Metropolitan university. He studies and writes about auditory culture and media history. His recent publications are *Reflecting on an Ear for Sound* (edited by Shuhei Hosokawa, 2021) and *Critical Words for Media Studies* (edited by Takeshi Kadobayashi and Nobuhiro Masuda). He is also an organizer of the music label named ombrophone records .

Yohei YAMAKAMI

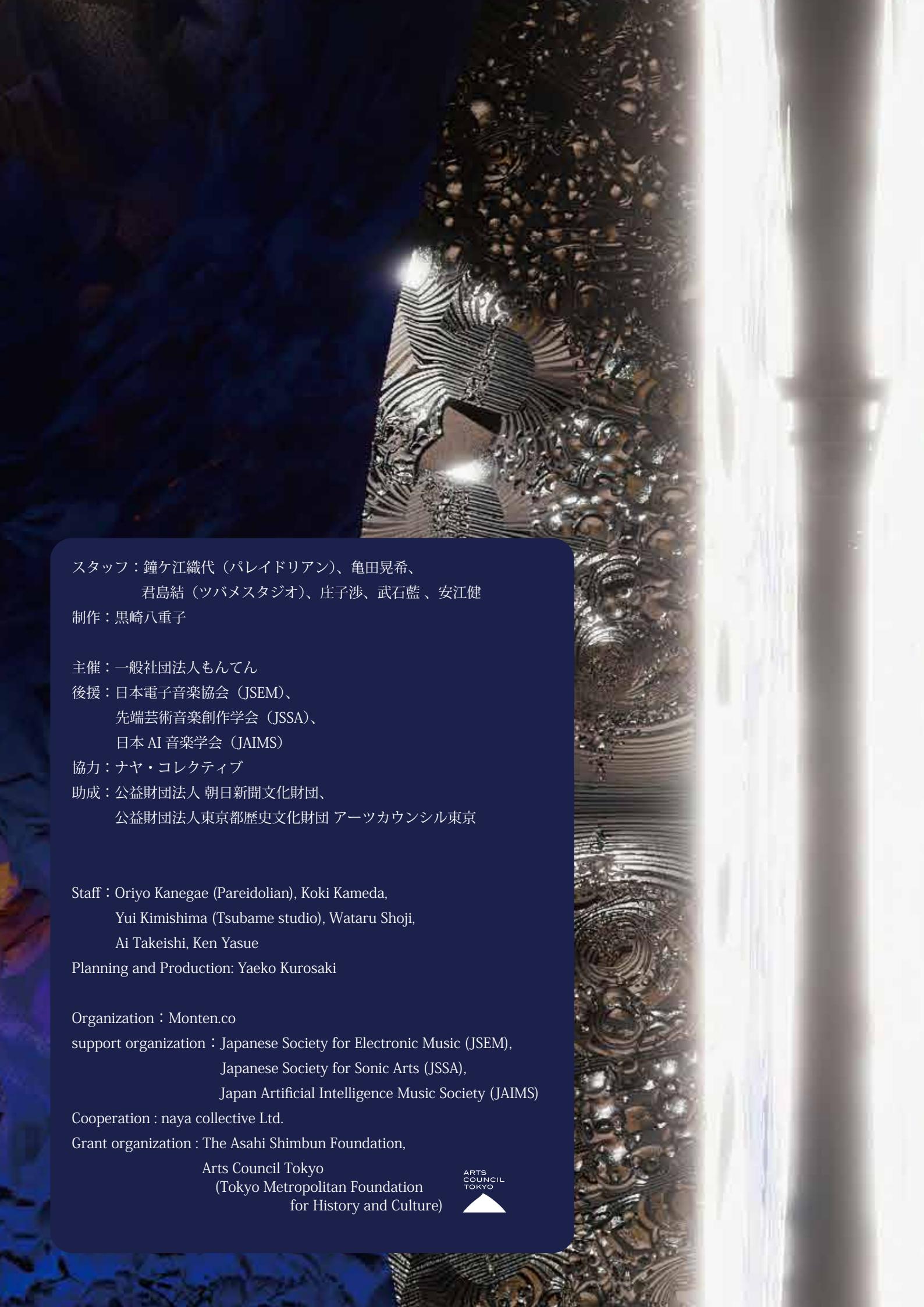
In 2011, received his doctorate for his research on the formation of modern French musicology from the Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo. He has lectured on music aesthetics at Tokyo University of the Arts and on video game audio and other topics at Atomu University and Tokyo Metropolitan University. Related works include the article "Formation et développement des cultures autour de la « Geemu Ongaku » (1980-1990)" (Kinephanos N.5, 2015) and "Geemu Ongaku" (in 'Sengo' no ongaku bunka [Music Culture in the 'Postwar' Era] Tatsuya Tonoshita ed., Seikyusha, 2016). He is currently a Project Lecturer at the Komaba Organization for Educational Excellence, University of Tokyo, where he organizes practical classes on sound design in a broad sense, including game audio, with the cooperation of artists.

Jun KOSAKA (P17)

Noriko OTANI (P24)

Asako MIYAKI (P15)





スタッフ：鐘ヶ江織代（パレイドリアン）、亀田晃希、
君島結（ツバメスタジオ）、庄子渉、武石藍、安江健
制作：黒崎八重子

主催：一般社団法人もんてん
後援：日本電子音楽協会（JSEM）、
先端芸術音楽創作学会（JSSA）、
日本AI音楽学会（JAIMS）
協力：ナヤ・コレクティブ
助成：公益財団法人 朝日新聞文化財団、
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

Staff : Oriyo Kanegae (Pareidolian), Koki Kameda,
Yui Kimishima (Tsubame studio), Wataru Shoji,
Ai Takeishi, Ken Yasue
Planning and Production: Yaeko Kurosaki

Organization : Monten.co
support organization : Japanese Society for Electronic Music (JSEM),
Japanese Society for Sonic Arts (JSSA),
Japan Artificial Intelligence Music Society (JAIMS)

Cooperation : naya collective Ltd.
Grant organization : The Asahi Shimbun Foundation,

Arts Council Tokyo
(Tokyo Metropolitan Foundation
for History and Culture)

